今月の読み物

「見たり、聞いたり、探ったり」No.289

通算 No.440

青　木　行　雄

「小澤征爾（おざわせいじ）」さんの生き様、歩んだ道。
（クラシック音楽界の巨星・指揮者）
2024年（令和６年）２月６日死去、88歳

世界の楽壇の第一線に立ち続け、戦後日本のクラシック音楽界を牽引（けんいん）した、巨星、指揮者「小澤征爾」さんが2024年２月６日心不全にて88歳の生涯を閉じた。

規格外の才能を花開かせたのは、やりたいことを絶対にやり抜く意志力、桁外れの行動力、そして愛すべき無鉄砲さがあったと言われる小澤さん。

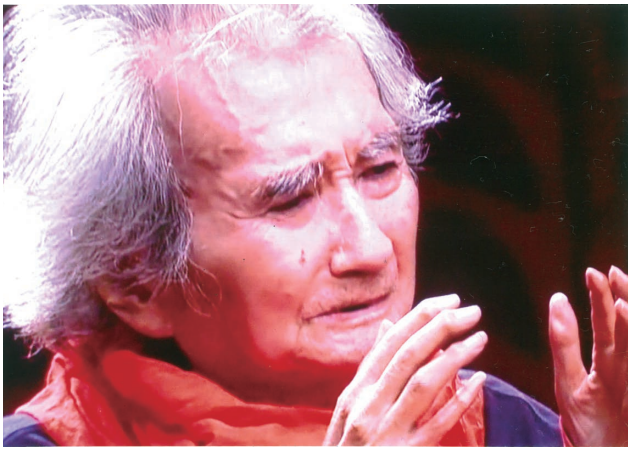
*①1958年（昭和33年）、１台のスクーターと貨物船に乗り、63日かけて欧州へ。日の丸付きのヘルメットをかぶり、ギターを背負って国から国へと渡り歩いた。

パリに漂着し、腕試しにと受けたブザンソン国際指揮者コンクールで優勝。ほかのコンクールもどんどん勝ち抜き、カラヤンに弟子入りし、名門ニューヨーク・フィルの副指揮者に大抜擢（ばってき）。躍進ぶりも規格外だった。

「ねえ先生。僕、バーンスタイン先生に教えてもらいにアメリカに行ってもいいですか」。そう、帝王と呼ばれたカラヤンにも屈託なく尋ねた。周囲からライバル扱いされていた２人だが、小澤さんにとっては最高の音楽を奏でる「同志」でしかなかった。物おじしない奔放な振る舞いを保守的な日本の楽壇がもてあまし、対立したNHK交響楽団に公演をボイコットされる事件まで起きたという。

小澤さんのベースとなった恩師・斎藤秀雄氏の指揮法は、西洋の音楽家にとっては自明のやり方を、他の文化圏の人々のために「翻訳」したものといえる。西洋人の「言葉」を自分たちのやり方で体得し、コンプレックスをも乗り超え、胸を張って自分たちの歌を歌おう。小澤さんはそんな斎藤の夢を背負い、

小澤征爾さん熟年の顔



小澤征爾さん、人との語らいには真剣に手を使って話す

立話しをする小澤征爾さんの姿

報道ニュース番組に答える小澤征爾さん

ご子息の征悦さんと話をする小澤さん

後半車イスで指揮を取る小澤征爾さん

彩りとニュアンスに満ちた音響を己の感性でたぐり寄せた。「外様にしか見つけられない本質もある」。そして小澤さんは、日本人の感性で西洋を説得するという革命を起こした。

1961年（昭和36年）、ニューヨーク・フィルを率いて初来日したバーンスタインが、当時25歳の小澤さんを舞台に呼び込んだ。口元をぎゅっと結び、指揮台でぶるっとひと震い。閃光（せんこう）のようにタクトを振り下ろし、自身の愛する黛敏郎の「バッカナール」で百戦錬磨の楽員たちと火花を散らした。戦後初めて、米国と対等に渡り合う日本の芸術家の姿が聴衆の心に深く刻まれた、歴史的な瞬間だった。感動、感激。

誰にも壁をつくらない生き方は、教育や啓蒙（けいもう）に対する情熱をも培ったのである。

「普通の人や子供たちにこそ、真剣に向き合わなきゃ」。これは、志半ばで逝った盟友、山本直純との約束でもあったという。

最後の10年は、相次いで襲ってくる病をかいくぐり、執念で指揮台に立ち続けた。力が抜けて軽みを増した指揮からは、楽員との即興的なやりとりが、より鮮明に浮かび上がるようになった。

ある日の終演後の楽屋で、そんな感想を小澤さんに伝えると「そう！僕はシンフォニー（交響曲）でオペラをやりたいんだよ」。対話の権化であるオペラの精神を、言葉や文化の壁のない楽器だけで実現する。そんな理想郷を小澤さんは生涯目指し、音楽の伝統を継ぐ「職人」のひとりとして国境を越え、欧州の伝統の系譜に連なった。*

頭の毛が多く白髪の小澤さん、指揮台での後姿は人間の行動とは思えない。いつも神業と感じていた。

小澤征爾さんの経歴

西　暦	邦　暦	年齢	経　　歴
1935年	昭和10年	0才	旧満州国奉天生まれ。翌年、北京に転居
1941年	昭和16年	6	日本へ帰国
1945年（ごろ）	昭和20年	10	ピアノを始める
1949年（ごろ）	昭和24年	14	ラグビーで指を骨折したこともあり、ピアニストの道をやめ指揮者を志して斎藤秀雄の弟子入りを請う
1951年	昭和26年	16	山本直純に師事
1952年	昭和27年	17	桐朋女子高音楽科入学。斎藤秀雄に師事
1955年	昭和30年	20	桐朋学園短大入学
1959年	昭和34年	24	単身渡仏、仏ブザンソン国際指揮者コンクールで優勝
1960年	昭和35年	25	カラヤンの弟子を選ぶコンクールで合格して師事
1961年	昭和36年	26	ベルリン・フィルを初指揮。ニューヨーク・フィル副指揮者に。バーンスタインに師事
1972年	昭和47年	36	新日本フィルハーモニー交響楽団を山本直純と結成
1973年	昭和48年	37	ボストン交響楽団音楽監督に就任
1978年	昭和53年	42	北京で中国中央楽団に客演
1979年	昭和54年	43	パリ・オペラ座デビュー
1980年	昭和55年	44	ミラノ・スカラ座デビュー
1992年	平成４年	56	サイトウ・キネン・フェスティバル松本（現セイジ・オザワ松本フェスティバル）開幕
1998年	平成10年	62	長野冬季オリンピック音楽監督に
2002年	平成14年	66	ウィーン国立歌劇場音楽監督に
2008年	平成20年	72	文化勲章受章
2010年	平成22年	74	食道がんで活動休止を発表
2012年	平成24年	76	作家の村上春樹さんとの共著で小林秀雄賞
2013年	平成25年	77	吉田秀和の後任として水戸芸術館館長に就任
2016年	平成28年	80	歌劇「こどもと魔法」を収めたアルバムが米グラミー賞の最優秀オペラ録音賞に
2019年	令和元年	83	水戸室内管弦楽団でピアニストのアルゲリッチと共演
2022年	令和４年	86	サイトウ・キネン・オーケストラを指揮。中継映像が国際宇宙ステーションに配信された
2024年	令和６年	88	２月６日、心不全にて死去

私の所属している会に東京アサヒ会という会がある。この会の第３代目の会長で秋田県出身、若い頃、オーストリアの首都ウィーンで「指揮者」の修行した、「佐藤菊夫」と言う尊敬する先生がいる。

佐藤先生は1929年（昭和４年）11月、秋田県の土崎の港町で生れた。父は音楽愛好家で３歳頃から音楽に興味を持ち、４歳頃から父新次郎にバリトン・ホルン等を教わり始めたという。

佐藤先生は太平洋戦争まっただ中の昭和17年に旧制秋田中学校に入学し、ブラスバンドに入部、童謡作家の小田島樹人に出会い作曲理論などを学ぶ。そして新潟大学へ進むが、２年で辞め、東京へ出て国立音楽大学へ入学、在学中からトロンボーンの演奏が認められ、音大を卒業後、東京交響楽団に入団する。その後、勉学の為、ウィーン国立アカデミー（現・ウィーン国立音楽大学）に入学。トロンボーンに加えて、作曲理論をフリードリヒ・ヴィルドガンスに、指揮法をハンス・スクロフスキーに師事した。

ウィーンは名実共に音楽の都である。中央ヨーロッパに位置し、すぐれた文化が集まった。

佐藤先生は、抜群に腕の立つ日本人トロンボーン奏者となり「トロンボーンのサトウ」と呼ぶ有名人となった。同時に指揮者としての腕も上げ、ウィーン・アカデミー管弦楽団でも演奏し、指揮台にも立った。指揮者としての腕前もみとめられ、音楽を通じた人との交流を無数に得て吸収して

佐藤菊夫先生と西川清子夫人。夫人は、チェンバロ奏者で共にウィーンで修行され有名人となった。佐藤菊夫コンサートは共催が多かった。すばらしい夫妻だった。88回目のコンサートはオーストリア国より芸術栄誉章受章記念コンサートだった。

いった。

日本の戦後復興が本格的に始まろうとする1961年（昭和36年）に帰国、世田谷に居を構え、東京交響楽団の指揮者となり、多数の法人作品の紹介に大きく寄与した。そして合唱団、交響楽団等の設立、創設、数々の音楽監督、理事長、総裁も務め、「佐藤菊夫コンサート」も前人未踏の第88回も開催した。

こんなことから、佐藤先生の御指導で交響楽団のコンサートには何十回となく参加し、聞く耳は多少肥えてきた。「小澤征爾」さんのコンサートにも何度か参上し、感動感激した思い出があった。

親友の「村上春樹さん」が小澤征爾さんへの思いを朝日新聞に寄稿した。その一部をとりあげて見たい。

*②亡くなってしまった小澤征爾さんのことを思うと、いくつもの情景が次々に頭に蘇ってくる。

ウィーンの街角を二人で歩いているときのことだが、短い距離を歩くのにずいぶん時間がかかってしまった。というのは、征爾さんはウィーンの街の辻音楽師のほとんどと知り合いらしく、「よう、マエストロ」と声をかけられると、歩を止めてそのままじっくり話し込んでしまうからだ。だからなかなか前に進めない。でも、そういう街角の音楽家と話をしている時の征爾さんの顔は、本当に楽しそうだった。おそらくマエストロは、彼らの「自由人」としての生き方が好きだったのだろう。そんな気がした。当時の征爾さんはウィーン国立歌劇場の音楽監督という重責を担っていた。言うまでもなくやりがいのある仕事だし、その栄誉ある職に就いていることを征爾さんは誇りに思っていた。しかしそれと同時に彼の中には、巨大な組織に手足を縛られることなく、広い草原を吹き抜ける風のように、自由気ままに音楽を奏でたいという強い気持ちがあったのではないか。その魂のおそらく半分くらいは、そういう世界を夢見ていたのではないか。そのような印象を僕は受けた。

ホノルルのカピオラニ公園を夕方散歩していたら、前から征爾さんが一人で歩いてきた。両手に北京ダックを抱えている。「それどうしたんですか」と尋ねたら、「北京ダックが急に食いたくなって、電話で注文したんだけどさ、手違いでダブってしまって、二個も買うことになったんだよ」ということだった。そのとき征爾さんはホノルルのアパートメントで一人で生活していた。「で、どうするんですか？」と尋ねると、「まあしょうがないから、一人で食べちゃうよ、ははは」ということだった。かなり大きな北京ダックだったので、ジュネーヴの二の舞になるんじゃないかと不安に思ったが、なんとかそのときは無事だったようだ。（以前、ジュネーヴで小澤征爾さんが消化不良により倒れた時に村上春樹さんが居合わせている）

そんな情景が次から次へと脳裏に浮かび上がってくる。もちろん征爾さんとはいろんな音楽の話もした。言うまでもないことだが、征爾さんは特別な才能を持った特別な音楽家だった。天才的と言ってしまえばそれまでだが、脳味噌の大部分が音楽関係の細胞でできているんじゃないかという気がするほどだった。音楽の話をしていると、その脳の働き具合の特別さに驚かされ、言葉を失ってしまうようなこともたびたびあった。彼にとっては当たり前のことなのだろうが、一般の人間にとっては――少なくとも僕のような音楽の門外漢にとっては――驚嘆すべきことが数多くあった。

征爾さんがオーケストラと練習するところを見ているのが好きだった。指揮者にはいろんなタイプがいる。独裁者タイプ、教師タイプ、のんびりした人もいればすぐに癇癪（かんしゃく）を起こす人もいる……征爾さん

はあまり感情を表に出すことなく、ゆっくりと、ひとつひとつ丁寧に細部のネジを締めていく人だった。オーケストラの出す音に注意深く耳を傾け、問題があればそれを指摘し、どこがいけないかをユーモアを交えてフレンドリーに説明し、その部分のネジを締める。それを何度も何度も繰り返して、彼の求める音を、音楽を、辛抱強くこしらえていく。

そういう作業をリハーサルの現場で見るのはとても興味深いことだった。不思議なことに、彼がネジをひとつ締めるたびに、その音楽は少しずつより自由で、より風通しのよいものになっていくのだ。そのことはいつだって僕を感心させた。どうしてそんなことが可能なのだろう……ネジを締めていけば全体は硬くなる――それがものごとの通常のあり方だ。でも征爾さんの場合は、ネジをぎゅっと締めることによってその結果、驚くほどすんなりと演奏から肩の力が抜けていくのだ。そしてその音楽はよりナチュラルな、より柔軟性を持つものとなっていく。生命が吹き込まれていく。僕はそれこそが「小澤マジック」のひとつの神髄ではないかと思っている。

「僕がいちばん好きな時刻は夜明け前の数時間だ」と征爾さんは言っていた。「みんながまだ寝静まっているときに、一人で譜面を読み込むんだ。集中して、他のどんなことにも気を逸らせることなく、ずっと深いところまで」

そんなときの彼の頭には音楽だけが鳴り響いていたのだろう。おそらくは無音のうちに。総譜を開けば、そこには純粋な音楽世界が展開した。それは哲学の理念と同じように、どこまでも純粋な、それ自体で完結したものだったかもしれない。それは夜明け前の暗闇を必要とするものだったかもしれない。

並べて語るのもおこがましいのだが、実を言えば僕も小説を書くとき、いつも夜明け前に起きて机に向かうようにしている。そして静けさの中で原稿をこつこつと書き進めながら「今頃は征爾さんももう目覚めて、集中して譜面を読み込んでいるかな」とよく考えた。そして「僕もがんばらなくては」と気持ちを引き締めたものだ。

そんな貴重な「夜明け前の同僚」が今はもうこの世にいないことを、心から哀しく思う。*

全文ではないが村上春樹さんのすばらしい感動すべき文面の一部をおかりして「小澤征爾」さんへ。又、指揮者である小澤征爾さんと私の尊敬する佐藤菊夫先生と同じ「ウィーンの森」で勉学に町角の居酒屋や劇場等で青春を謳歌(おうか)したかと思うと、たまらなく、身ぶるいする程、親近感も感じて。又、ファンの一人としても、お別れの文面としたい。そんなことで佐藤菊夫先生の事も文面の中に入れさせてもらった。

記　令和６年２月３日

＊①部分　朝日新聞デジタル（４月４日）「評伝　愛すべき無鉄砲、壁つくらぬ「目力」　小澤征爾さん死去」より転載

＊②部分　朝日新聞デジタル（２月11日）「小澤征爾さんを失って　村上春樹さん寄稿」より転載

参考資料

朝日新聞　　日経新聞

NHKテレビ　　TBSテレビ